東上記

寺田寅彦

八月二十六日床を出でて先ず欄干に倚(よ)る。空よく晴れて朝風やゝ肌寒く露の小萩のみだれを吹いて葉鶏頭(はげいとう)の色鮮やかに穂先おおかた黄ばみたる田面(たのも)を見渡す。薄霧(うすぎり)北の山の根に消えやらず、柿の実撒砂(まきすな)にかちりと音して宿夢(しゅくむ)拭うがごとくにさめたり。しばらくの別れを握手に告ぐる妻が鬢(びん)の後(おく)れ毛(げ)に風ゆらぎて蚊帳(かや)の裾ゆら〱と秋も早や立つめり。台所に杯盤(はいばん)の音、戸口に見送りの人声、はや出立(いでた)たんと吸物の前にすわれば床の間の三宝(さんぼう)に枳殻(からたち)飾りし親の情先ず有難(ありがた)く、この枳殻誤って足にかけたれば取りかえてよと云う人の情もうれし。盃一順。早く行て船室へ場を取りませねばと

立上がれば婢僕(ひぼく)親戚上(あが)り框(かまち)に集(つど)いて荷物を車夫に渡す。忘れ物はないか。御座りませぬ。そんなら皆さん御機嫌よくも云った積(つも)りなれどやゝ夢心地なればたしかならず。玄関を出れば人々も砂利(じゃり)を鳴らしてついて来る。用意の車五輛口々に何やら云えどよくは耳に入らず。から〳〵と引き出せば後にまた御機嫌ようの声々あまり悪からぬものなり。見返る門柳監獄の壁にかくれて流れる水に漣漪(れんい)動く。韋駄天(いだてん)を叱する勢いよく松(まつ)が端(はな)に馳(か)け付くれば旅立つ人見送る人人足(にんそく)船頭ののゝしる声々。車の音。端艇涯(きし)をはなるれば水棹(みさお)のしずく屋根板にはら〳〵と音する。舷(ふなべり)のすれあう音よ

うやく止んで船は中流に出でたり。水害の名残(なごり)棒堤(ぼうづつみ)にしるく砂利に埋るゝ蘆(あし)もあわれなり。左側の水楼に坐して此方(こっち)を見る老人のあればきっと中風(ちゅうぶう)とはよき見立てと竹村はやせば皆々笑う。新地(しんち)の絃歌(げんか)聞えぬが嬉(うれ)しくて丸山台まで行けば小蒸汽(こじょうき)一艘(そう)後より追越して行きぬ。

昔の大名それの君、すれちがいし船の早さに驚いてあれは何船と問い給えば御附きの人々かしこまりて、あれはちがい船なればかく早くこそと御答え申せば、さらばそのちがい船を造れと仰せられし勿体(もったい)なさと父上の話に皆々またどっと笑う間に船は新田堤にかかる。

並んで行く船に苅谷氏も乗り居てこれも今日の船にて熊本へ行くなりとかにてその母堂も船窓より首さしのべて挨拶する様ちと可笑(おか)しくなりたれど、じっとこらゆるうちさし込む朝日暑ければにや障子ぴたりとしめたり。程なく新高知丸の舷側(げんそく)につけば梯子(はしご)の混雑例のごとし。荷物を上げ座もかまえ、まだ出帆には間もあればと岩亀亭(がんきてい)へつけさせ昼飯したゝむ。江上油のごとく白鳥飛んでいよいよ青し。欄下の溜池に海蟹(うみがに)の鋏(はさみ)動かす様がおかしくて見ておれば人を呼ぶ汽笛の声に何となく心急(せ)き立ちて端艇出させ、道中はことさら気を付けてと父上一句、さらば御無事でと子供等の声々、

後に聞いて梯子駆け上れば艫に水白く泡立ってあたりの景色廻り舞台のようにくる〳〵と廻ってハンケチ帽子をふる見送りの人々。これに応ずる乗客の数々。いつの間にか船首をめぐらせる端艇小さくなりて人の顔も分き難くなれば甲板に長居は船暈の元と窮屈なる船室に這い込み用意の葡萄酒一杯に喉を沾して革鞄枕に横になれば甲板にまたもや汽笛の音。船は早や港を出るよと思えど窓外を覗く元気もなし。『新小説』取り出でて読む。宙外の「血桜」二、三頁読みかくれば船底にすさまじき物音して船体にわかに傾けり。皆々思わず起き上がる。港口浅せたるためキールの砂利に

触るゝなるべし。 あまり気味よからねば半頁程の所読んではいたれど何がかいてあったかわからざりしも後にて可笑しかりける。 船の進むにつれて最早(もはや)気味悪き音はやんで動揺はようやく始まりて早や胸悪きをじっと腹をしめて 専(もっぱ)ら小説に気を取られるように勉(つと)むればよう〱に胸静まり、 さきの葡萄酒の酔心。 ほっとしていっしか書中の人となりける。 ボーイの昼食をすゝむる声耳に入りたれどもとより起き上がる事さえ出来ざる吾(われ)の渋茶一杯すゝる気もなく黙って読み続くるも実はこのようなる静穏の海上に一杯の食さえ叶(かな)わぬと思われん事の口惜(くちお)しければなり。

一篇広告の隅々まで読み終りし頃は身体ようやく動揺になれて心地やゝすが〱しくなり、半ば（なか）身を起して窓外を見れば船は今室戸岬（むろとざき）を廻るなり。百尺岩頭燈台の白堊（はくあ）日にかがやいて漁舟の波のうちに隠見するもの三、四。これに鷗（かもめ）が飛んでいたと書けば都合よけれども飛魚（とびうお）一つ飛ばねば致し方もなし。舟傾く時海また傾いて深黒なる奔潮天と地との間に向って狂奔するかと思わるゝ壮観は筆にも言語にも尽すべきにあらず。甲（かん）の浦（うら）沖を過ぐと云う頃ハッチより飯櫃（めしびつ）膳具（ぜんぐ）を取り下ろすボーイの声八（や）ヶましきは早や夕飯なるべし。少し大胆になりて起き上がり箸を取るに頭思いの外（ほか）に軽く

て胸も苦しからず。隣りに坐りし三十くらいの叔母様の御給仕忝(かたじけな)しと一碗を傾くればはや厭(いや)になりぬ。寺田寅彦さんと云う方は御座らぬかとわめくボーイの濁声(だみごえ)うるさければ黙って居けるがあまりに呼び立つる故オイ何んだと起き上がれば貴方(あなた)ですかと怪訝顔(けげんがお)なるも気の毒なり。何ぞと言葉を和(やわ)らげて聞けば、上等室の苅谷さんからこれを貴方へ、と差出す紙包あくれば梨子(なし)二つ。有難しとボーイに礼は云うて早速(さっそく)頂戴するに半分ばかりにして胸つかえたれば勿体なけれど残りは窓から外へ投げ出してまた横になればようやく暗く人々の苦にせし夕日も消えて甲板を下り来る人多

くなり、窮屈さはいっそう甚だしけれど吾一人にもあらねば致し方もなし。隣りに言葉訛(なま)り奇妙なる二人連れの饒舌(じょうぜつ)もいびきの音に変って、向うのせなあが追分(おいわけ)を歌い始むれば甲板に誰れの持て来たものか轡虫(くつわむし)の鳴き出したるなど面白し。甲板をあちこちする船員の靴音がコツリ〳〵と言文一致なれば書く処なり。夢魂いつしか飛んで赴く処は鷹城(たかじょう)のほとりなりけん、なつかしき人々の顔まざ〳〵と見ては驚く舷側の潮の音。ねがえりの耳に革鞄の仮枕いたずらに堅きも悲しく心細くわれながら浅猿(あさま)しき事なり。残夢再びさむれば、もう神戸(こうべ)が見えますると隣りの女に告ぐる

ボーイの声。さてこそとにわかに元気つきて窓を覗（のぞ）きたれど月なき空に淡路島（あわじしま）も見え分かず。再びとろ〳〵として覚むれば船は既に港内に入って窓外にきらめく舷燈の赤き青き。汽笛の吼（ほ）ゆるごとき叫ぶがごとき深夜の寂寞（せきばく）と云う事知らぬ港ながら帆柱にゆらぐ星の光はさすがに静かなり。革鞄と毛布と蝙蝠傘（こうもりがさ）とを両手一ぱいにかかえて狭き梯子を上って甲板に上がれば既に船は桟橋（さんばし）へ着きていたり。苅谷氏に昨夕の礼をのべて船を下り安松へ上がる。岡崎賢七とか云う人と同室へ入れられ、宅（うち）へ端書（はがき）したゝむ。時計を見ればまだ三時なり。しかし六時の急行に乗る積りなれば落付いて眠

る間もなかるべしと漱石師などへ用もなき端書したゝむ。ラムネを取りにやりたれど夜中にて無し、氷も梨も同様なりとの事なり。退屈さの茶を啜(すす)れば胸ふくれて心地よからず。とかくするうち東の空白み渡りて茜(あかね)の一抹(いちまつ)と共に星の光まばらになり、軒下に車の音しげくなり、時計を見れば既に五時半なり。急いで朝飯かき込み岡崎氏と停車場に馳(か)けつくれば用捨気(ようしゃげ)もなき汽車進行を始めて吐き出す煙の音乗り遅れし吾等を嘲るがごとし。珍しき事にもあらねど忌々(いまいま)しきものなり。先ず荷物を預けんとて二人のを一緒に衡(はか)らす。運賃弐円とは馬鹿々々しけれど致し方もなし。楠公(なんこう)へで

も行くべしとて出立（いでた）たんとせしがまてしばし余は名古屋にて一泊すれども岡崎氏は直行なれば手荷物はやはり別にすべしとて再び切符の切り換えを求む。駅員の不機嫌顔甚だしきも官線はやはり官線だけの権力とか云うものあるべしと、かしこみて願い奉りようよう切符を頂戴して立ちいずれば吹き上ぐる朝嵐に藁帽（わらぼう）飛んでぬかるみを走る事数間（すうけん）、ようやく追い付きて取止（とりと）めたれど泥にまみれてあまり立派ならぬ帽の更に見ばえを落したる重ね〳〵の失敗なり。旅なればこれも腹は立たず。元町（もとまち）を線路に沿うて行く。道傍の氷店に入ってラムネ一瓶に夜来の渇望も満たしたればこゝに小荷

物を預けて楠公祠（なんこうし）まで行きたり。亀の遊ぶのを見たりとて面白くもなし 湊川（みなとがわ）へ行て見んとて堤を上る。昼なれば白面の魑魅（りょうみ）も影をかくして軒を並ぶる小亭閑（かん）として人の気あるは稀なり。並木の影涼しきところ木の根に腰かけて憩（いこ）えば晴嵐（せいらん）梢を鳴らして衣に入る。枯枝を拾いて砂に嗚呼（ああ）忠臣など落書すれば行き来の人吾等を見る。半時間ほども両人無言にて美人も通りそうにもなし。ようよう立上がりて下流へ行く。河とは名ばかりの黄色き砂に水の気なくて、照りつく日のきらめく暑そうなり。川口に当りて海面鏡のごとく帆船の大き小さきも見ゆ。多門通りより元の道に出てまた前の

氷屋に一杯の玉壺を呼んで荷物を受取り停車場に行く。今ようやく八時なればまだ四時間はこゝに待つべしと思えば堪えられぬ欠伸（あくび）に向うに坐れる姉様けゞん顔して吾を見る。　時これ金と云えばこの四時間何金に当るや知らねどあくびと煙草（たばこ）の煙に消すも残念なり、いざや人物の観察にても始めんと目を見開けば隣りに腰かけし 印半天（しるしばんてん）の煙草の火を借らんとて誤りて我が手に火を落しあわてて引きのけたる我がさまの吾ながら可笑しければ思わず噴き出す。　この男バナナと隠元豆（いんげんまめ）を入れたる提籠（さげかご）を携えたるが領（えり）しるしの水雷亭とは珍しきと見ておればやがてベンチの隅に倒れてねてしまい

ける。富米野と云う男熊本にて見知りたるも来れり。同席なりし東も来り野並も来る。

こゝへ新(あらた)に入り来りし二人連れはいずれ新婚旅行と見らるゝ御出立(おんいでたち)。すじ向いに座を構えたまうを帽の庇(ひさし)よりうかゞい奉れば、花の御かんばせすこし痩せたまいて時々小声に何をか物語りたまう双頬(そうきょう)に薄紅さして面(おも)はゆげなり。人々の視線一度に此方(こなた)へ向かえば新郎のパナマ帽もうつむきける。この二人間(ま)もなく大阪行のにて去る。引きちがえて入り来る西洋人のたけ低く顔のたけも著しく短きが赤き顔にこればかり立派なる鬚(ひげ)ひねりながら煙草を人力(じんりき)に買わせて向側のプ

ラットフォームに腰をかけ煙草取り出して鬚をかい上ぐるなどあまり上等社会にもあらざるべし。これと同じ白衣着けたる連れの男は顔長く頬髯（ほおひげ）見事なれど歩み方の変なるは義足なるべし。この間改札口幾度か開かれまた閉じられて汽笛の止む間もなし。人来り人去っていつまでも待合の隅に居残るは吾等のみなるぞつまらなき。ようやく十二時となりて、プラットフォームに出でんとすればこの次のなりとてつきかえされし、重ね〴〵の失敗なりける。ようやくにして新橋行のに乗り込む。客車狭くして腰掛のうす汚きも我慢して座を占むれば窓外のもの動き出して新聞売の声後になる。

右には未だ青き稲田を距(へだ)てて白砂青松の中に白堊の高楼蜑(あま)の塩屋(しおや)に交じり、その上に一抹の海青く汽船の往復する見ゆ。左に従い来る山々山骨(さんこつ)黄色く現われてまばらなる小松ちびけたり。中に兜(かぶと)の鉢を伏せたらんがごとき山見え隠れするを向いの商人体(てい)の男に問う。何とか云いしも車の音に消されて判らず。再三問いかえせしも訛(なまり)の耳なれぬ故か終(つい)にわからず。気の毒にもあり可笑しくもあれば終にそのままに止みぬ。後にて聞けば甲山(かぶとやま)と云う由。あたりの山と著しく模様変れるはいずれ別に火山作用にて隆起せるなるべし。これのみは樹木黒く茂りたり。

蟬なくや小松まばらに山禿（はげ）たり

など例の癖そろ〳〵出で来る。大阪にて海南学校出らしき黒袴（くろばかま）下り、乗客も増したり。幸いに天気あまり暑からざればさまでに苦しからず。山崎を過ぐれば与一兵衛（よいちべえ）の家はと聞けど知る人なし。勘平（かんぺい）らしき男も見えず、ただ隣りの男の眼付やゝ定九郎（さだくろう）らしきばかりなり。五十くらいの田舎女の櫛（くし）取り出して頻（しき）りに髪梳（くしけず）るをどちらまでと問えば「京まで行くのでがんす。息子が来いと云いますのでなあ」と言葉つき不思議なるを、国はと問えば広島近在のものなる由。飾り気一点なきも樸訥（ぼくとつ）のさま気に入りてさま〴〵話しなどする

うち京都々々と呼ぶ車掌の声にあわたゞしく下りたるが群集の中にかくれたり。京に入りて息子とかの宿に行くまでの途中いさゝか覚束なく思わるゝは他人のいらぬ心配かは知らず。やがて稲荷（いなり）を過ぐ。伏見人形に思い出す事多く、祭り日の幟（のぼり）立並ぶ景色に松蕈（まつたけ）添えて画きし不折（ふせつ）の筆など胸に浮びぬ。山科（やましな）を過ぎて竹藪ばかりの里に入る。左手の小高き岡の向うに大石内蔵助（くらのすけ）の住家今に残れる由。先ずとなせ小浪（こなみ）が道行姿（みちゆきすがた）心に浮ぶも可笑（おか）し。やゝ曇り初（そ）めし空に篁（たかむら）の色いよ〳〵深くして清く静かなる里のさまいとなつかしく、願わくば一度は此処（ここ）にしばらくの仮りの庵（いおり）

を結んで篁の虫の声小田（おだ）の蛙（かわず）の音にうき世の塵に汚（けが）れたる腸（はらわた）すゝがんなど思ううち汽車はいつしか上り坂にかゝりて両側の山迫り来る。山田の畔（あぜ）に**しれい**のごとき草花面白きは何と云うものにや。この辺りまで畑打つ男女何処（どこ）となく悠長に京びたるなどもうれし。茶畑多くあり。春なれば茶摘みの様（さま）汽車の窓より眺めて白手拭の群に**あばよ**などするも興あるべしなど思いける。大谷（おおたに）に着く。この上は逢坂（おうさか）なり。この名を聞きて思い出す昔の語り草はならぶるも管（くだ）なるべし。さねかずらとはどんなものかしらず、蔦這（つたは）いでる崖に清水したゝって線路脇の小溝に落つる音涼し。窓より首さ

しのべて行手を見るに隧道（ずいどう）眼前に窅然（ようぜん）として向うの口銭（ぜに）のまわりほどに見ゆ。これを過ぐれば左に鳰（にお）の海（うみ）蒼くして漣漪水色縮緬（ちりめん）を延べたらんごとく、遠山模糊（もこ）として水の果ても見えず。左に近く大津の町つらなりて、三井寺（みいでら）木立に見えかくれす。唐崎（からさき）はあの辺かなど思えど身地を踏みし事なければ堅田（かただ）も石山も粟津（あわづ）もすべて判らず。九つの歳（とし）父母に従うて東海道を下りし時こゝの水楼に鰷魚（はや）の塩焼の骨と肉とが面白く離るゝを面白がりし事など思い出してはこの頃の吾なつかしく、父母の老い給いぬる今悲しかり。さては白湾子（はくわんし）と共に名古屋に遊びし帰途伊勢を経て雪夜こゝに一夜を明かせ

し淋しさなどもさまぐ偲ばる。草津の姥(うば)が餅(もち)も昔のなじみなれば求めんと思ううち汽車出でたれば果さず。瀬田(せた)の長橋(ながはし)渡る人稀に、蘆荻(ろてき)いたずらに風に戦(そよ)ぐを見る。江心白帆の一つ二つ。浅き汀(みぎわ)に簾様(すだれよう)のもの立て廻せるは漁(すなど)りの業(わざ)なるべし。百足山(むかでやま)昔に変らず、田原藤太(たわらとうた)の名と共にいつまでも稚(おさな)き耳に響きし事は忘れざるべし。湖上の景色見飽かざる間に彦根城いつしか後になり、胆吹山(いぶきやま)に綿雲這いて美濃路(みのじ)に入れば空は雨模様となる。大垣の商人らしき五十ばかりの男頻(しき)りに大垣の近況を語り関(せき)が原(はら)の戦(いくさ)を説く。あたりようやく薄暗く工夫体(こうふてい)の男甲走(かんばし)りたる声張り上げて歌い

出せば商人の娘堪えかねてキヽと笑う。　長良川（ながらがわ）木曽川いつの間にか越えて清洲と云うに、この次は名古屋よと身支度（みじたく）する間に電燈の蒼白き光曇れる空に映じ、はやさらばと一行に別れてプラットフォームに下り立つ。丸文（まるぶん）へと思いしが知らぬ家も興あるべしと停車場前の丸万と云うに入る。　二階の一室狭けれども今宵（こよい）はゆるやかに寝るべしと思えば船中の窮屈さ蒸暑（むしあつ）さにくらべて中々に心安かり。　浴後の茶漬も快く、　窓によれば驟雨沛然（しゅううはいぜん）としてトタン屋根を伝う点滴の音すゞしく、電燈の光地上にうつりて電車の往きかう音も騒がしからず。　こうなれば宿帳つけに来し男の濡れ髪かき分け

たるも涼しく、隣室にチリンと鳴るコップの音も涼しく、向うの室の欄干に倚（よ）りし女の白き浴衣（ゆかた）も涼しげなり。昨日よりの疲れ一時に洗い去られしようにてからだのび〱となる。手を拍（う）ちて床（とこ）をのべさせ横になれば新しき浴衣の肌さわりも快く、隣室の話声遠きように聞えし後は魂いずこへか飛んで藻ぬけの殻となり電燈消しに来し事もいつか知らず。円（まど）かなる夢百里の外に飛んで眼覚むれば有明の絹燈蚊帳（かや）の外に朧（おぼろ）に、時計を見れば早や五時なり。手洗い口すゝぎなどするうち空ほの〲と明けはなれたるが昨夜の雨の名残まだ晴れやらず、蚊帳をまくる風しめっぽきも心悪からず。

膳に向かえば大野味噌汁。秋琴楼(しゅうきんろう)に仮寓(かぐう)の昔も思い出さしむ。勘定をすませ丸く肥え太りたる脊(せい)低き女に革鞄提(さ)げさして停車場へ行く様、瘦馬と牝豚の道行(みちゆき)とも見るべしと可笑(おか)し。この豚存外に心利きたる奴にて甲斐々々しく何かと世話しくれたり。間もなく駆け来る列車の一隅に座を構えて煙草取り出せばベルの音忙(せわ)しく合図の呼子。汽笛の声。熱田(あつた)の八剣(やつるぎ)森陰より伏し拝みてセメント会社の煙突に白湾子と焼芋かじりながらこのあたりを徘徊(はいかい)せし当時を思い浮べては宮川(みやがわ)行の夜船の寒さ。さては五十鈴(いすず)の流れ二見(ふたみ)の浜など昔の草枕にて居眠りの夢を結ばんとすれどもならず。大府(おおぶ)岡

崎御油(ごゆ)なんど昔しのばるゝ事多し。豊橋も後になり、鷲津(わしづ)より舞坂(まいさか)にかゝる頃よりは道ようやく海岸に近づきて浜名(はまな)の湖窓外に青く、右には遠州洋(えんしゅうなだ) 杳(よう)として天に連なる。漁舟江心に向かいてこぎ出せば欸乃(あいだい)風に漂うて白砂の上に黒き鳥の群れ居るなどは『十六夜日記(いざよいにっき)』そのままなり。浜松にては下りる人乗る人共に多く窮屈さ更に甚だしくなりぬ。掛川(かけがわ)と云えば佐夜(さよ)の中山(なかやま)はと見廻せど僅かに九歳の冬此処(ここ)を過ぎしなればあたりの景色さらに見覚えなく、島田藤枝(ふじえだ)など云う名のみ耳に残れるくらいなれば覚束(おぼつか)なし。金谷(かなや)の隧道(ずいどう)長くて灯を点(とぼ)したる、これは昔蛇の住みし穴かと云いししれ者

の事など思い出す。静岡にて乗客多く入れ換りたれど美人らしきは遂に乗らず。東の方は村雨（むらさめ）すと覚しく、灰色の雲の中に隠見する岬頭（こうとう）いくつ模糊（もこ）として墨絵に似たり。それに引きかえて西の空麗（うるわ）しく晴れて白砂青松に日の光鮮やかなる、これは水彩画にも譬（たと）うべし。雨と晴れとの中にありて雲と共に東へ〳〵と行くなれば、ふるかと思えば晴れ晴るゝかと思えばまた大粒の雨玻璃窓（はりまど）を斜に打つ変幻極まりなき面白さに思わず窓縁（まどべり）をたたいて妙と呼ぶ。車の音に消されて他人に聞えざりしこそ仕合せなりける。

大井川の水涸（か）れ〳〵にして蛇籠（じゃかご）に草離々たる、越す

に越されざりし「朝貌日記（あさがお）」何とかの段は更なり、雲助（くもすけ）とかの肩によって渡る御侍、磧（かわら）に錫杖（しゃくじょう）立てて歌よむ行脚（あんぎゃ）など廻り燈籠のように眼前に浮ぶ心地せらる。街道の並木の松さすがに昔の名残を止むれども道脇の茶店いたずらにあれて鳥毛挟箱（とりげはさみばこ）の行列見るに由（よし）なく、僅かに馬士歌（まごうた）の哀れを止むるのみなるも改まる御代（みよ）に余命つなぎ得し白髪の媼（おうな）が囲炉裏（いろり）のそばに水洟（みずばな）すゝりながら孫玄孫（やしゃご）への語り草なるべし。

このあたりの景色北斎（ほくさい）が道中画譜をそのままなり。興津（おきつ）を過ぐる頃は雨となりたれば富士も三保（みほ）も見えず、真青なる海に白浪風に騒ぎ漁（すなど）る船の影も見えず、磯

辺の砂雨にぬれてうるわしく、先手の隧道（ずいどう）もまた画中のものなり。

此処小駅ながら近来海水浴場開けて都府の人士の避暑に来るが多ければ次第に繁昌する由なり。岩淵（いわぶち）の辺甘蔗畑（かんしょばたけ）多くあり。折から畑に入るゝ肥料なるべし異様のかおり鼻を突きて静岡にて求めし弁当開ける人の胸悪くせしも可笑しかりける。沼津を過ぐれども雨雲ふさがりて富士も見えず。

御殿場（ごてんば）にて乗客更に増したる窮屈さ、こうなれば日の照らぬがせめてもの仕合せなり。小山（おやま）。山北（やまきた）も近づけば道は次第上りとなりて渓流脚下に遠く音あり。

一八（いちはつ）の屋根に鶏鳴きて雨を帯びたる風山田に青く、車中には御殿場より乗りし爺が提（さ）げたる鈴虫なくなど、海抜幾百尺の静かさ淋しささま〴〵に嬉しく、哀れを止むる馬士歌の箱根八里も山を貫き渓（たに）をかける汽車なれば関守（せきもり）の前に額（ひたい）地にすりつくる面倒もなければ煙草一服の間に山北につく。ひとしきり来る村雨に鮎の鮓（すし）売る男の袖しとゞなるもあわれ。このあたり複線路の工事中と見えたり。山霧深うして記号標の芒（すすき）の中に淋しげなる、霜夜の頃やいかに淋しからん。

これより下り坂となり、国府津（こうづ）近くなれば天また晴れたり。今越えし山に綿雲かゝりて其処とも見え分か

ず。さきの日国府津にて宿を拒まれようやくにして捜し当てたる町外れの宿に二階の絃歌を騒がしがりし夕、夕陽の中に富士足柄（あしがら）を望みし折の嬉しさなど思い出してはあの家こそなど見廻すうちにこゝも後になり、大磯（おおいそ）にてはまた乗客増す。海水浴がえりの女の群の一様に大なる藁帽子かぶりたるなど目に立つ。柵の外より頻（しき）りに汽車の方を覗く美髯公（びぜんこう）のいずれ御前（ごぜん）らしきが顔色の著しく白き西洋人めくなど土地柄なるべし。立派なる洋館も散見す。大船（おおふな）にて横須賀行の軍人下りたるが乗客はやはり増すばかりなり。隣りに坐りし静岡の商人二人しきりに関西の暴風を語り米相場を説けば

向うに腰かけし文身（いれずみ）の老人御殿場の料理屋の亭主と云えるが富士登山の景況を語る。近頃は西洋人も婦人まで草鞋（わらじ）にて登る由なりなどしきりに得意の様なりしが果ては問わず語りに人の難儀をよそに見られぬ私の性分までかつぎ出して少時（しばし）も饒舌（しゃべ）り止めず、面白き爺さんなり。程（ほど）が谷（や）近くなれば近き頃の横浜の大火乗客の話柄（わへい）を賑わす。これより急行となりたれば神奈川鶴見などは止らず。夕陽海に沈んで煙波杳（よう）たる品川の湾に七砲台朧（おぼろ）なり。何の祝宴か磯辺の水楼に紅燈山形につるして絃歌湧き、沖に上ぐる花火夕闇の空に声なし。洲崎の灯影長うして江水漣漪（れんい）清く、電燈煌（こう）として列車

長きプラットフォームに入れば吐き出す人波。 下駄の音靴のひゞき。

（明治三十二年九月）

底本：「寺田寅彦全集　第一巻」岩波書店
　　1996（平成8）年12月5日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Nana ohbe
校正：松永正敏
2004年3月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。